

健康文化

法要

今井田 二三子

梅の花の香る季節が訪れるとお師匠様の法要の案内が届き、それを手にしますと私の心の何処かの線が途端に緊張するのを感じます。日頃の心遣いに怠りはなかったらどうか、配慮に手抜きはしていなかったらどうか、そして私の日頃の行いはどうか等々、受けた教えの数々が心の中から飛び出してきます。今年の法要には恥ずかしい思いをしないように、また一年一回だけ会うことになってしまった弟子の方々に接し、日頃のこころの弛みを痛いほど思い知ることがないようにと、自分の一言に耳を傾け、一挙を顧みる回数が急に多くなってきます。

忘れもしないそれは一周忌の法要の時のことでした。京都の妙心寺境内の寺院で厳修された法要のあと午後の老師様の法話を拝聴するため残った数人がお師匠様の墓のある竜安寺内の寺へ参りました。池の辺りにあるその墓地は塵一つなく掃き清められ、墓前には生き生きとした花がつつましく清らかに供えてありました。ただ墓地の隅に小枝が一つ落ちていたのが私の視野に入りましたが私は拾いあげようとしませんでした。それを遅れて墓地に入ってこられた弟子の一人の方がつと拾いあげられ音もなく何処かへ移されたのを感じ私は恥ずかしさで一杯になりました。

一年間の心の弛みを痛いほど感じました。しかも帰りの花園駅でまた同じ思いを繰り返しました。その日は三月半ばでしたが冷たい風が激しく吹き荒れ、プラットホームの上で塵や紙切れが舞い上がり、転げ廻りしていましたが半面ほどの新聞紙が風に飛ばされてきて私の脚に当たりましたがそれを感じながら立ち話をしていた私はまた拾いあげようとはしませんでした。すると墓地で小枝を拾い上げられたMさんが風に乗って飛んでゆくその新聞紙を魔術師のように手中に収められ一瞬の間に屑入れの中に入れられるのを見て私はまた倍加した恥ずかしさを覚えました。一年間これと同じように物事を目で見、耳で聞きながら心を使っていなかったことを痛いほど思い知りました。来年はこんな恥ずかしい思いをしなくてすむように怠りなく心を使うことをその時決心しました。今年では四回目の法要の案内を手にして今の自分はどうかと自身に問

いかけていました。

その寺では毎月第二日曜日には月例の法話がありお師匠様は何十年もの間岐阜から通われました。私達も希望者はその月例会に加わることができ老師様の法話を拝聴することができました。今回の法話は高僧鏡清の教えの卒啄機(そつたくき)についてでありました。鳥の雛が孵るとき、その時を感じた親鳥が外から殻を啄き、中からは今孵ろうとする雛鳥が殻を卒きそこに新しい生命が生まれ出る(師の教えを会得する)という教えのことだと理解しました。それは師の教えと弟子の感知が瞬間に一致するという意味深く厳しいものを感じられ、心、行、共に限りなく師に近づいていなければいけないことだと思いました。

その日の老師様の法話を私なりに受けとったつもりで帰りましたが、来年また法話を拝聴することがあれば今年の受けとりの浅さを感じるかもしれません。またそうでなければならぬと思いつつ既に心の何処かに弛みを感じ始めております。

(内科開業医)